



What a colorful world (後編)

ペンネーム : Tommy Harley

前編 (No. 26) では、ごく端的にですがLGBT (性的マイノリティ) について書いてみました。

なぜ私がこんなことを書こうと思ったかという、その存在や実態を知る人が増えれば、当事者たちを生きづらくする状況が良くなっていくのではないか、書くことが誰かにもっと知ってもらいきっかけとなったら…と考えたからです。

LGBTの多くが日々不安や困難を抱えながら過ごしています。性的指向や性自認は自らの意思で選んだり変えたりできないものであるにもかかわらず、世の中の偏見は根深く、異端視や拒絶をされ、自分を偽らざるをえなかったり、命にかかわる状況にある人もいます。差別やヘイトは、相手をよく知らないために感じる恐怖心の表れでもあり、正確な情報や知識を広めたり身近な当事者の「見える化」が進んだりすれば、それらが解消されていくのではないかと考えています。

私自身について

私はLGBTのT (トランスジェンダー) にあたり、心と体の性が一致していません。生まれ持った女性の体や女性として扱われることなどに、幼い頃からずっと違和感・嫌悪感・混乱がつきまっています。性自認 (心の性) ははっきりわからないのですが、自分の心理、思考、感覚などは、一般的な男性の傾向と共通する部分が多いと感じます。性的指向は女性ですが、私にとって女性は異性なので、同性愛者とは言えません (同・両性愛者のトランスジェンダーもいます)。

学校生活は息苦しく、不登校→高校中退→ひきこもり→うつ…と、暗闇の中で青少年期を過ごしました。その後も現実うまく適応できないまま何者にもなれず、ただずるずると生きてきました。

数年前から、自分以外のLGBTの存在を知ることが増えたり、理解してくれる人たちに出会えたり、当事者同士の集まりに参加し始めたりしたことで、徐々に自分を肯定できるようになりました。

期待の大きい教育のチカラ

欧米を中心にLGBTの人権意識が大きく高まり、日本でも状況は良くなりつつあると感じます。しかし相変わらず「オカマ」、「キモい」などの嘲笑はどこにでも聞こえ、テレビも教科書も男女二元論と異性愛が前提のストーリーばかり…。特に、まだ視野が狭く、不確かで偏った情報を受け取りやすい子どもにとってLGBTである (かもしれない) ということは、不安・いじめ・不登校・自己否定などの困難につながりやすく切実な問題です。

教員がLGBTについての認識を深め、日頃から教育現場でその正しい知識や肯定的なメッセージを発信したり、セクシュアリティのことを話しやすい環境を作るといった取り組みが求められています。非当事者の子どもたちにとっても、世界や人間の多様性・寛容を学ぶ機会となります。身近な大人として大きな影響力を持つ教師に知識と理解があれば、救われる子どもたちはたくさんいます。

It gets better

LGBTの困難は当事者側の問題ではありません。人々の意識、制度や法律の整備など、問われているのは社会の成熟度だと思います。いろんな「違い」を受け入れ合える社会は、マイノリティのみならず誰もが生きやすい社会となるでしょう。

私も当事者としてできることを探っていきたいと思います。いつか「みんな違うのがフツー」で誰もが自分らしく生きられるカラフルな世界が実現したら…今も心の奥の方で泣いている子どもの自分も救われるのではないかなと思うのです。

「すぐ隣りにもそんな人がいるかもしれない」と想像してみることから、世界は変わり始めるのかもしれない。

※LGBTの理解促進には本人のカムアウトが有効だと思いますが、考慮の末、この場では本名を伏せました。